

# 真木

## 第 180 号

〒261-0004  
千葉県美浜区高洲  
1-14-9-503  
田所節子方  
千葉県俳句作家協会  
事務局  
TEL 043-277-1056

〒299-1143  
君津市君津台 2-8-4  
石井紀美子方  
「真木」編集部  
TEL 0439-52-6254

## 目 次

巻頭言 設立四十五年を迎えて …… 会長 能村研三 ……	1
新春俳句大会・祝賀会 ……	2
千葉県俳句作家協会設立四十五周年を迎えて ……	4
千葉県俳壇二ユース ……	6
ひろば ……	8
結社賞、会員著書紹介 ……	9
新入会員一句、受贈誌より、事務局日誌 ……	10

### 巻頭言

## 設立四十五年 を迎えて

会長 能村 研 三



平成二十九年を迎えました。千葉県俳句作家協会、会員の皆様新年あけましておめでとうございます。当協会は昨年設立四十五周年を迎えました。これも偏に会員の皆様による熱意あるご支援の賜物であると心より感謝申し上げます。

昭和四十六年五月に設立総会が千葉市の奈良屋デパートで開催され、出席者は八十八名と未広がり的人数で、これからの発展を予感させるものでありました。初代会長には杉本北柿さんが就任されました。本年二月十一日には、これを記念して県内の関係者及び俳句総合誌の編集長をご来賓にお招きして、四十五周年記念祝賀会が開催されます。これを大きなステップとして、さらに当協会が発展して県内の俳壇活動を活性化すると共に千葉県県の文化振興の発展にも尽力していきたいと考えておりますので、皆様には今まで以上のご協力ご支援をお願いいたします。

当協会では、県内俳壇の資質向上と県民文化の振興に寄与するため、昨年より「千葉県俳句大賞」を設け、第一回目は中央俳壇でも名声のある大串

章氏の『海路』が大賞に輝きました。二回目となる本年も二十編の句集が対象となっておりますがあらためて、千葉県俳句作家の質の高さ層の厚さに驚くものがあります。

秋に開催される県民俳句大会は、昨年で第五十八回目を迎え、約九五〇組、一九〇〇句の作品が寄せられ、十月十六日に千葉県文化会館で大会が開催されました。二年目となった「少年少女の部」今回は七五〇名の小中学生の参加がありました。

当日は一部父兄や付き添いの先生共々参加された生徒さん初々しい姿を拝見し、俳句の未来に光が射しているように思いました。

本県の俳句人口は全国的に見てもベスト5に入るものと思われませんが、温暖な気候と豊かな海と大地に恵まれ、俳句を詠む環境に最も恵まれていると言えますが、地形が広く県都千葉市に一同に集まるのは中々困難であります。こうしたことを踏まえながらも千葉県全体の俳句作家が集える組織作りを本年も目指していきたいと思っております。よろしくお願いたします。

設立四十五周年記念 新春俳句大会・祝賀会

二月十一日千葉県俳句作家協会恒例の新春懇親俳句会が千葉市のホテルプラザ菜の花で開催された。本年は、協会設立四十五周年の記念大会となるため、従来と趣向を変え、一部・俳句大会、二部・祝賀会の二部制でとり行われた。

【俳句大会】

午後一時、秋尾敏理事長の司会で、事前投句者六十七名の内、当日欠席者があり、参加者五十四名にて俳句大会が「菜の花」で始まった。最初に



能村会長挨拶



俳句大会第1位の  
門谷 杜人 氏

三枝かずを副会長の開会の辞があり、続いて能村研三会長挨拶があった。会長からは、四十五年に亘る当協会の発展の歴史と、第二回千葉県俳句大賞と第三十一回協会賞の発表があった。

引き続き、俳句会が行われた。事前に一組二句の投句を募集し、これも従来と趣向を変え、参加者による互選はなく、協会役員が当日十句（特選一句）の選を持寄り、その結果が、加藤峰子、村上喜代子の両理事の披露で発表された。採点は、荒木甫、北川昭久、谷本元子、藤岡貞夫の四理事。その結果、当日欠席者を除く高得点者の表彰式が行われ、一位の門谷杜人氏、二位の田所節子氏、三位の菅谷たけし氏には立派な楯が、四位から十五位までの入賞者には賞品の図書券が授与された。なお、採点を待つ間、能村会長より懇切丁寧な講評があり、俳句会は予定通り、午後二時半、増成栗人副会長の閉会挨拶で終了した。（小野正之記）

新春俳句大会作品集

入賞者と代表作品（二句合計得点 ○数字は順位、一人一句のみ記す）

- ① にんげんが見えてくるまで枯野道 15点 (特5) 門谷 杜人
- ② 月光に音を吸はれて滝凍つる 12点 (特5) 田所 節子
- ③ どんど火の千切れて星の増えにけり 11点 菅谷たけし
- ④ 冬帽子たたいて今日を終りけり 10点 (特2) 高橋 健文
- ⑤ 凍滝の月に研がるる碧さかな 10点 (特2) 栗原 公子
- ⑥ 大海に漕ぎ出すごとし初日記 9点 (特1) 本池美佐子
- ⑦ 谷底の薬湯に来る冬の月 9点 (特1) 秋尾 敏
- ⑧ 寒造りまだ濡れてるる峡の空 9点 増成 栗人
- ⑨ 風花や余白ばかりのパスポート 9点 楠原 幹子
- ⑩ 初東風や古墳のどこか声生るる 9点 竹内タカミ
- ⑪ 出不精といふ冬眠のごときもの 8点 川合 憲子



乾杯の音頭を取る 三枝副会長



祝賀会司会の 川合副理事長

午後三時、予定通り懇親会が、会場を「楨」に移して、九名の来賓を迎えて、六十三名の参加で立食パーティー形式で行われた。司会は、川合憲子副理事長と門谷杜人氏。まず能村会長の挨拶があり、続いて乾杯の音頭の後、食事と歓談に入った。ひとしきり個人同士の交流も終り、胃袋も膨らんだ頃を見計らい、来賓の方々からの御祝辞を

〔祝賀会〕

- ⑫ 鬼の子ににんげんの息かけてやる 7点 (特1) 小林 実
  - ⑬ 初雪や絵本の中が空っぽに 7点 (特1) 石井紀美子
  - ⑭ 冬麗の空丸く飛ぶ伝書鳩 7点 山崎 幸子
  - ⑮ 思ひ出をコマ送りして日向ぼこ 7点 塩野谷慎吾
- (田所節子記)



県芸文協秋原会長 能村会長



秋尾理事長 千葉日報社秋原社長

頂いた。先ず千葉県芸術文化団体協議会の秋原会長より御祝辞を頂き、続いて千葉日報社の秋原社の御祝辞があり、コールサック社鈴木代表、「俳句」白井編集長、「俳壇」安田編集長、「俳句界」林編集長、「俳句四季」西井代表取締役から丁寧なるお言葉を頂いた。続いて、本日発表された、第二回千葉県俳句大賞の受賞者、大賞・鳴戸奈菜氏、準賞・広渡敬雄氏、奨励賞・栗原公子氏の謝礼の挨拶があった。能村会長からは、表彰式は五月に改めて行いたいとの発表があった。

なお、「角川文化振興財団」「文學の森」「本阿弥書店」「東京四季出版」「ふらんす堂」の各社からは会場を彩る華やかな花が寄贈された。

こうして設立四十五周年記念新春俳句大会・祝賀会は、午後四時半塩野谷仁副会長の一本締めで無事終了した。

(小野正之記)



祝賀会・会場風景



第2回千葉県俳句大賞・大賞受賞の鳴戸奈菜氏

## 設立45周年を迎えて

### 継続は力なり

副会長 増成 栗人

俳句をはじめ、あらゆる分野に於てよく使われる慣用語の一つに「継続は力なり」の一語がある。千葉県俳句作家協会も、昨年、設立四十五周年を迎えた。半世紀近くの年数。その全ては知らぬが、幾多の先達の大きな努力があつて今日の協会の存在があると熟知している。まさに「継続は力なり」の歳月を経ての成長の足跡なのだ。

この歳月を現在の会員諸氏と祝うとともに、更に大きく結実させねばならぬ責務を、今の世代が背負つてゆかねばと、改めて葎々と感じ取っている。同じ足跡の延長戦の切り返しでは新しい力は生れない。

能村研三会長のもと、この一年間、新しい挑戦への機運が高まりつつある。千葉県人の上梓した句集に対する「千葉県俳句大賞」の設定もその一つだし、「千葉県俳句作家協会賞」のあり方にも新しい応募方式が採られた。また俳句総合誌の全てに「千葉県俳句作家協会」を喧伝する努力も、新しき力となつて俳壇に浸透しつつある。

四十五周年は一つの里塚。千葉県在住の作家が一つになれる団体はこしかない。会員諸氏の力を結集し、より研鑽し、より親しく、より有意義な団体として、新しき継続の力を生む。その成果を問われる一里塚だと、改めて強く己に問う年としたい。

### 設立四十五周年に思う

副会長 三枝かずを

今から四十五年前、私は病院を開業して二年、とても「俳句」どころではない日々を送っていたはずである。それが結成後わずかに三年で上梓された『合同句集』に加わっているから、われながら不思議な感じがする。その序文は当時の編集委員長である柴田白葉女さんが書いている。

始めてお目にかかったのは昭和二十七年、私がまだ千葉大学の教養課程の学生時代である。ご夫君は大学の数学の教授で「微分・積分学並びに微分方程式」の講義をされていた。戦後間もない頃で四街道の兵舎の跡のような仮住まいにお邪魔した。その時にお茶を勧めて下さった奥様が有名な俳人とは知る由もなかった。そういえば石田波郷の「朝顔の紺のあなたの月日かな」という短冊が掲げられていたことを鮮明に覚えているから、やはりご縁があつたのだろう。当時の入会は厳しく、何らかの俳誌に所属し、しかも同人でなければならぬように聞いていた。私は当時千葉大学医学部の同人雑誌『やはぎ』の同人ということで入会させてもらったように記憶している。今、当時の規約をみると二名の推薦があつて常任委員会の承認があればよいと書いてあつた。多分、萩原季葉・村山さとしの先輩お二方が推薦してくれたから、実力や熱心さに関わりなくパスしてしまつたのだろう。まだ三十八歳であつた。

### 俳句は「縁」

副会長 塩野谷 仁

先ず、千葉県俳句作家協会の設立四十五周年を祝したい。四十五年と言えは小半世紀。その間には多くの歴史が過ぎ去つたものと思われるが、それにしても俳句はつくづく「業」であり「縁」だと思つている。協会の年譜を見ると、設立は昭和四十六年五月。初代会長は杉本北祐氏で、三代目の会長は大木五大夫氏。この大木五大夫氏にはなみなみならぬ思い出がある。

昭和三十五年頃、転勤で佐原市(現香取市)在住となり、暇にまかせて俳句を作つては各新聞社に投稿を始めた。いわゆる投稿マニア。すぐ産経俳壇の皆吉爽雨選の常連となり、千葉日報俳壇の大木五大夫選では投句のほとんどが採用されるようになった。ペンネームでの投稿、だつたのだが、そのうちに佐原俳句連盟の人達に知れ渡つたようで、いつか句会に招かれるようになった。そこには香取哲郎氏や増田斗志氏などがいて誠に家庭的な雰囲気。居心地が良かったのだが、一年ほどして金子兜太の「海程」を知ることとなりすべての投稿を止めてしまった。そのため、大木五大夫先生には生前、その警咳に接することなく今日にきてしまったことがなんとも心残りではない。

俳句が「座の文学」とすればその源は「縁」でもある。その「縁」を大事にする集団こそが本物なのだ、今思つている。

## 千葉県俳句作家協会

## さらなる飛翔を

顧問 今留 治子

春を迎える恒例の行事として定着した千葉県俳句作家協会の新春俳句大会が、協会設立四十五周年を記念して、祝賀会が開催されましたこと、誠に喜ばしく存じます。

私が当協会及び県や市の役員に係る自覚をもちましたのは昭和末頃からでしたが、これは一重に学生時代から東京に席をおいて居た私が、結婚して千葉に住みながら千葉県の俳句行事に一切出席しないことに、萬緑の幹部で作家協会の役員の先輩が、時に激しく時に優しく皮肉っては熱心にお誘い下さった賜物と、今にして感謝して居ります。

当時は東京に席があり、親しい友も居ない千葉に何故…という思いがよぎって居りましたが、体力が老いて来ると活動範囲は地元に限る地はないと改めて実感。もともと俳句は座の文芸であり、人との絆には痛感しておりましたが、晩節の八年間(四期)の当協会での会長役は仮有としか言いようがない思い一入でした。

人間に限らず生きとし生くるものは枯れ、老いは必ず訪れるもの。然し自然を相手に俳句を詠む私共俳人にとつての老いは、今迄培つて来た知恵や経験を活かし、学問や文芸、道徳、宗教等の精神的所産―決して物質的所産ではない―最も豊かに成熟した輝かしい花道であり、ステージであると思う、いや、そうであるべきと切に祈念致します。

尚、誇り高い政令都市の、千葉県俳句協会の会長として、県との絆を結ぶまでしばらく努めますので御協力お願い申し上げます。

## 素晴らしい先人達

顧問 三苦 知夫

四十五周年という一寸半端な感じだが、私にとつては、転入後、千葉県で過ごした俳句人生と重なるので、殊更に感銘深いものがある。

新日鐵・君津製鐵所の建設に伴って、全国から数千人の社員とその家族が君津に転動して来た。

私の転勤は昭和四十四年。その翌年益田清さんが、北九州から赴任して来ると、すぐに社宅集会所を利用して俳句会が誕生した。

昭和四十七年に「きみさらず俳句会」が発足。千葉県俳句作家協会の設立はその前年であった。

作家協会発足当初は、中々出席出来なかつたが、「合同句集・第一集」(昭和四十九年)には参加している。

私が役員に加わつたのは平成三年で、以後平成二十二年まで、二十年間務めさせて頂いた。お蔭で、代々の素晴らしい俳人や、指導者の方々の警咳に接することが出来た。

故会長では大木五大夫、小出秋光、河合凱夫、萩原季葉等、私にとつては貴重な財産である。

中でも、萩原会長には、事務局長として四年間仕えたので、思い出深いものがある。

成田騒動過激な時期に県公安委員長を務められており、勲二等瑞宝章受賞、突発入院等動顛することも多かったが、いつも数歩先で道をつけて誘導して頂いた。只管感謝。

## 俳人の輪を

顧問 水見 壽男

初めて出席した千葉県俳句作家協会の会議名が、幹事会というのが、今一ぴんと来なかつた。一般論としては理事会が相応しいのではないか。萩原会長や益田副会長の持つ雰囲気に乗せられる形で理事会案を提案したところ、検討しようという会長発言で、以下諸々の意見が交わされる形となり、名称のみならず他の部門へも発展して、現在の形に修つたものである。

二つ目の提案は吟行会のこと。流山俳句協会の第一回の吟行会に続く二回目として利根運河吟行を提案し了承を得て平成十三年に実施した。

そのあと提案したのが、協会の組織外の適地として成田山吟行を企画した。成田山新勝寺は著名である。新勝寺には少しばかりの俳縁はあるが、本丸は成田市役所、しかも市の広報担当の的を絞って本山と市役所の両方を相手に日参もどきの説得と交渉に入った。新勝寺の広報紙智光には、毎号投句欄があり選者は歴代の狎下が努めておられる。橋本照稔狎下とは少しばかりの俳縁がある。交渉は専ら成田市広報担当と、市の考え方が待たれることになった。流山俳句協会の役員共どもの交渉が実を結び新勝寺と市役所からの了承を得て、一五人の参加者による吟行会となった。

新勝寺からは書道美術館の観覧のご理解を得るなど、無事吟行会の責任を果たし得たものである。

この吟行会実現の一つは、協会のイベントを自治体がどう理解して折合うかということに勉強させられた。

# 千葉県俳壇ニユース

## 第二十回松戸市俳句大会

日時 平成二十八年七月十八日(海の日)

場所 松戸市民劇場

応募句入賞者(二位から十五位の内)

- 一位 佐々木リサ・二位 脇坂順雄・三位 岩下三香子・四位 脇坂順雄・五位 梁原善子
- 当日句入選者(一位から十五位の内)

- ① 連山を一座となせる青田原 堀岡せつこ
  - ② 緑蔭のつづきのやうな書庫に入る 岩淵喜代子
  - ③ まん丸に書けた太陽夏休み 築 幸枝
  - ④ 蝸螂の子が散る風に乗りて散る 増成 栗人
  - ⑤ 涼しさの影踏みといふ遊びかな 丸澤 孝子
- なお「写生の要諦」と題して「街」主宰今井聖氏の記念講演があった。

(松戸俳句連盟会報「万つきと」第三十九号より)

### 市川市芸術祭

## 第六十八回市川市市民俳句大会

日時 平成二十八年十月二日

会場 市川市文学ミュージアム

共催 市川市・市川市俳句協会

四季雑詠、一組二句。出句五二〇句

上位入賞作品(〇内は順位)

- ① 初蟬のまだ濡れてゐる声なりし 樋口 英子

② 渾身の高さでありぬ蟬の殻

酒井 裕子

賽の音に秋思の亀の首伸ばす

平野ふき子

③ ばあちゃんと呼ばれて外すサングラス

柴田 歌子

始まりはいつも突然木の実降る

佳田 翡翠

④ 汗拭いて顔の小さくなりにけり

楠原 幹子

筑紫 磐井特選

⑤ 灯り消しちちに闇を返しけり

佐々木 群

秋風やおんおんと昼の鐘

小川 笙力

⑥ 月光や妻を連れ出す車椅子

石川 笙児

敗荷に何か人生考へる

梅野 ぎん

⑦ 長生きの途中の日向ぼつこかな

戸川 玲子

木犀の香りに慣れてしまふ午後

抜井 諒一

⑧ また風をすくうて捕虫網白し

中村 世都

坊城 俊樹特選

⑨ 生きている限りは戦後百日紅

酒井 裕子

大花野何でもできる子をつれて

筑紫 磐井

⑩ 間欠泉収穫祭に和して起つ

甕 秀麿

秋晴の中なる蝶を消せる青

抜井 諒一

⑪ 物忘れしながら生きて大根蒔く

荒原 節子

十月はかうでなければならぬ晴

辻 梓溯

⑫ 折鶴を解けば真白広島忌

江澤 弘子

増田 善昭特選

⑬ 夜会服のやうな金魚を貰ひけり

千田 百里

一条の水音に秋澄みにけり

油原めぐみ

⑭ 梨好きへ供へて声のなき会話

藤原 照子

朝顔や漬物ひさぐ店の端

井上 芳秋

⑮ 風紋の果てに原子炉秋暑し

藤田 満

蜻蛉の光りとなりて見失ふ

内田たけし

(楠原幹子記)

(佳田翡翠記)

## 日本伝統俳句協会

### 第四十一回千葉部会俳句会

日時 平成二十八年十月二日(日)

会場 成田山新勝寺・信徒会館

恒例の千葉部会俳句会は、協会外より筑紫磐井氏をお招きして今年も成田山で開催した。幾つもの他行事と重なり参加者は例年の半分以下となったが、句会後は能舞台のある有形文化財として知られる大野屋での懇親会にも多数の方々にご参加いただき、選者を囲み熱気溢れる会となった。

大久保白村特選

鯉の背に止まるつもりの蜻蛉かな 抜井 諒一

## 「万象」誌創刊十五周年記念号発行

大坪景章主宰「万象」は昨年十五周年を迎え、同誌の十月号を記念号として発行した。慶祝。

本号は「伊吹嶺」主宰をはじめ諸氏による十五周年祝句、大坪主宰の記念講演要旨、記念俳句賞・評論賞発表、私の一句「万象」全同人アンケート他特集を編み、巻末に「万象」略年譜を付し、充実した企画構成で一八〇頁余の大冊になった。

記念俳句賞 ひたち路・内海保子  
記念評論賞 主宰大坪景章の「師系の継統」と実作・江見悦子

(同誌十月号より)

### 第六十二回流山市文化祭参加俳句大会

流山市俳句協会（会長北川昭久）は、平成二十八年度第六十二回流山文化祭に参加し、十一月三日（木）流山市生涯学習センターで左記の俳句大会を行った。

#### 一、第十四回流山市少年少女俳句大会表彰式

中学校九校（三二四六名・六七一六句）、小学校十六校（一八一九名・四一〇一〇句）から一万句を超える応募があり入賞者が決まった。成績は、

- ①市長賞 ②市議会議長賞 ③教育長賞までを掲載。

#### 小学生の部

- ①里山をホタルが舞って星になる 野澤 美咲
- ②雨上がり空の湖にじの橋 松本 莉央
- ③静けさに心やすらぐ秋の夜 栗田 実穂

#### 中学生の部

- ①シャキシャキと太陽の味夏野菜 山本 彩和
- ②大きめの制服を着て入学式 竹部 仁菜
- ③風鈴の心の声に耳すます 鈴木 琴子

#### 二、一般の部

- ①市長賞 ②市議会議長賞 ③教育長賞
- ④文化協会長賞 ⑤俳句協会長賞

- ①一粒の米も百行豊の秋 大山 茂
- ②長き夜や糸図片手に読む源氏 小野 正之
- ③肩書のなき身に付きて草の種 浪岡 郁子
- ④七十路は未開の頁夕花野 梓 孝江
- ⑤新蕎麦を打つ一本の棒捌き 牧添 昌秋

（流山俳句協会 小泉欣也報）

### 当協会能村会長、日本詩歌句協会の随筆大賞受賞

当協会能村研三会長が、昨年「沖」四十五周年を記念して刊行した『飛鷹抄』（「真木」一七六号紹介済）が、日本詩歌句協会の随筆大賞を受賞され、九月二十四日に授賞式が執り行われた。慶祝。（沖）平成二十八年十一月号より

### 第五十回市原市文化祭俳句大会開催

去る十一月五日、サンプラザ会館に於いて市原市俳句協会主催の秋季大会が響焰同人千葉県現俳協副会長 渡辺澄先生を主選者に迎え席題「通草」「新豆腐」に秋の一日を大いに楽しんだ。結果は左記の通り。

#### 兼題の部 席題の部

- 市長賞 松本 正子 佐々木結花
- 俳句協会賞 井原 美鳥 城本美寿々
- 市議会議長賞 岡崎 武 丸 喜久枝
- 市教育長賞 佐々木結花 安沢善三郎
- 文化祭委員長 馬淵 津枝 米川喜美代
- 主選者特選句

#### 兼題の部

- 古里に母みて山の粧へり 伊東 泰子
- 坂に出て手すりありけり十三夜 三浦 慶子
- 席題の部
- 通草喰う幼もなくて落ちにけり 武田 輝義
- たぐり寄す明日の明るき通草蔓 米川喜美代

（西澤照雄記）

### 第六十三回柏市文化祭俳句大会

柏市俳句連盟・柏市文化祭実行委員会主催の文化祭俳句大会は、十一月十二日柏市中央公民館において、九〇名の参加を得て盛大に執り行われた。上位入賞者の代表句は次の通り。

- 入賞者（互選三句合点順位）代表句（○内は順位）
- ①長風呂をそつと見に行く夜長かな 池田 恭子
- ②石榴の実なかには口を割らぬもの 箕輪カオル
- ③コスモスの高さに風の戯れる 浜野佐登子
- ④縄文の音をまとひて木の実降る 藤岡 貞夫
- ⑤悪相の林檎や宇宙に重力波 実羽 繁
- ⑥病むことの二つや二つとろろ汁 大園 智子
- ⑦ロボットに謝っている文化の日 軍地 京子
- ⑧鯛焼のみな火傷して生まれけり 田中 春雪
- ⑨秋日和音を編み込む指揮者かな 石山 幸月
- ⑩日向ぼこ一人ぼつちという二人 椎名 鳳人

### 「軸」誌 通巻六〇〇号達成

秋尾敏主宰の「軸」は、昨年の十二月号を以て通巻六〇〇号に達した。慶祝。

一月八日に六〇〇号記念新年俳句大会、六月二十五日には、柏市に於いて「軸」創刊五十周年記念俳句大会・祝賀会を開催の予定。

元朝の鶏鳴湖が張りつめる 秋尾 敏

（同誌平成二十八年十二月・一月号より）

### 「ろんど」誌 三〇〇号記念号発行

当協会理事のすぎき巴里主宰「ろんど」は、昨年十二月号を以て三〇〇号に達し、同号を記念号として刊行した。慶祝。

本誌は、ろんど各賞発表（「真木」別項掲載）、角谷昌子、有馬朗人諸氏による「諸家随想・諸家近詠」、会員の「私の二句」、主宰の句集『パリ祭』特集等、多彩な編集にて重厚な記念号となった。

#### 三〇〇号記念コンクール入賞

俳句の部 鳥居おさむ賞「明日香風」川村 文英  
隨筆の部 鳥居美智子賞「出会い」 中田のぶ子  
（同誌平成二十八年十二月・一月号より）

### 第三十七回四街道市民文化祭俳句大会

日時 平成二十八年十一月十三日  
会場 四街道市文化センター

#### 入賞作品（〇内順位）

源流主宰賞

蜻蛉や百歳生きし亡母なれど

市長賞

廃屋に寄り添ふように柿熟るる

議長賞

立冬や介護終へたる柿の黙

教育長賞

天も地も病みて阿修羅や大枯野

農業協同組合長賞 齋藤 溥子  
固まりし脳の溶けゆく秋の天  
商工会長賞 新澤 誠  
農道に足音刻む秋の暮 池田 幸  
⑦露の身や一本の線引きて行く 置鮎 隆一  
⑧心身の崩れ繕ふ鱗雲 佐藤 徹  
⑨秋深し妻の呼びかけ杖代り 大庭 芳郎  
⑩農機具を手放すと決め零余子めし 小出治重報

### 「原人」誌 創刊七十周年記念号発行

三枝青雲主宰「原人」は、創刊七十周年となり本誌一月号を記念号として発行した。慶祝。

当協会の能村会長をはじめ、増成・三枝・塩野谷副会長のお三方と秋尾理事長の祝句が記念号に華を添えた。なお、記念式典及び祝賀会が一月八日「京成ホテルミラマール」にて開催された。

七十周年誌齢に感謝屠蘇祝ふ 三枝 青雲  
（同誌一月号より）

### 「いには」誌 一〇〇号記念号発行

村上喜代子主宰「いには」は本年一月号で通巻一〇〇号に達し、同号を記念号として発行した。

記念特集として、一〇〇号記念俳句コンクール受賞作品発表他、「いには」賞作家に期するものⅡ」と題しての座談会などが誌面を飾った。慶祝。

記念俳句コンクール受賞者  
最優秀賞「大南風」坂本茉莉、二席・野口寿雄、三席・大久保文夫、佳作・関戸信治 他四名  
露けしや書いて呑み込むおまじなひ 村上喜代子  
（同誌一月号より）

### ひろば

#### 県内吟行地紹介

### 石堂寺

JR内房線三原駅から北へ約六キロ、自然豊かな山裾に「天台宗長安山石堂寺」はある。今から約一三〇〇年前の和銅元年（七〇八年）奈良の僧、恵命・東照が秘宝アショカの王塔を護持してこの地を訪れ、草庵を結びこれを祀ったのがこの寺の始まりとされる。南房総最古の寺である。その後、室町期には里見氏の厚い信仰を受け、現在、天台宗の安房本山格の寺院として多くの信仰を集めている。

山門をくぐり、約一〇〇段ほどの曲がりくねった石段を登ると視界が開け、石堂寺「本堂」が

現れる。右手に「多宝塔」、その後ろ少し上がったところに「薬師堂」があり、すべて室町時代、一五〇〇年代の建立で、国の重要文化財に指定されている。本堂内の諸像は、平安末期の仏像で、丑年と午年に御開帳される。

多宝塔には以前、江戸末期に活躍し、波を彫らせた天下一品と謳われた「波の伊八」こと武志伊八郎の彫刻があったが、現在は取り外され、寺務所内で見学できる。

また、本堂奥にはこれも国の重要文化財で江戸時代中期の旧家であった「旧尾形家住宅」が梅林の中に保存されている。梅は一月末から二月にかけて、美しく咲き誇る。

（千葉県俳句作家協会会員 東 國人記）



「鴻」誌 十周年記念全国大会・祝賀会

増成栗人主宰の「鴻」は、昨年七月号を以て創刊十周年を迎え、十月二十三日、市川グランドホテルにて十周年記念全国大会・祝賀会を開催した。式典では結社賞（「真木」一七九号紹介済）の表彰式他、祝賀会は当協会の能村会長はじめ沢山の来賓が出席。当日の模様を一月号にて、出席者の写真とコメント等で綴り伝えている。慶祝。林中の一樹一樹に冬の黙

増成 栗人  
(同誌一月号より)

結社賞

平成二十八年年度「好日」三賞

好日賞 久保さちを

ピリオドの如き木の実を文机に

同佳作 大塚功子・中嶋三雄

降りさうな風の匂ひや花槐

山はみなよき名をもてり青葉木菟

青雲賞 折原真理恵

茅花流しくるぶしの存在感

同準賞 寺内由美

明易き窓に昨日と同じ街

同佳作 中村瞳・高原保子

見えさうな色の風なり秋桜

蘊蓄を聞いてゐるなり桜餅

白雲賞 相原一枝・藤井康太郎

白寿まで頑張るつもり寒卯

裏山も那須連山も笑ひけり

(「好日」平成二十八年十一月号より)

平成二十八年年度浮巢賞

浮巢賞(第二十一回) 半澤由紀・河西富子

咲き開けし椿に里の風強し

由紀

学園の幾何学フエンス薔薇芽吹く 富子  
浮巢新人賞(第二十一回) 鈴木真沙枝  
風に身をまかせてをりて千草摘む 真沙枝  
(「浮巢」一月号より)

平成二十九年沖・結社賞

沖賞(第四十五回) 該当なし

珊瑚賞(第三十九回) 七種年男・峰崎成規

どんどの火輪中の空をつらぬけり 年男

銀河より一滴こぼれ水の星 成規

新人賞(第四十五回) 該当なし

新人奨励賞(第四十五回) 藤代康明・小林陽子

噴水の穂先で踊る陽のピエロ 康明

白鳥を見てきし夜のロシアンテイ 陽子

(「沖」一月号より)

平成二十八年年度野火三賞

野火賞 古木真砂子

セーターに前と後ろや首が出て

青霧賞 小田 笑

二百十日スライスレモンの断面

新人賞 伊藤泰子・長谷部かず代

あんぱんの臍のかたちや昭和の日

午後四時の夕焼け小焼け柿落葉

(「野火」一月号より)

平成二十八年年度「ろんど」各賞

ろんど功労賞 佐藤涼宇子

百年の魚版のぎいと冴ゆるかな

ろんど賞 小瀧洋子・佐藤満智子

撫で牛の光届きて梅一輪

月見草空母浮きたる夜の静寂

奨励賞 小幡喜世子・佐藤玲華

まばたきは細波のごと春の星

慎みて墨書の名札敬老日

新人賞 まつのたく  
筆箱に収めし秘密桜貝 たく  
(「ろんど」一月号より)

平成二十八年年度第二回「鴻」俳句賞(二位・五位)

倒立のからくり童子風光る 佐久間敏高

凍蝶とおなじ日向に鎌を研ぐ 吉田 明子

真つ新な雪に一步を年をんな 大屋敷 悠

水門の開き人日の鶯の笛 高橋 葉子

柀の花うすうすと匂ひけり 森川 淑子

(「鴻」十月号より)

会員著書紹介

●句集『生地』 川合憲子 著

当協会副理事長を務め、「好日」誌の編集長として活躍中の著者の第四句集である。木更津市生れ、同市在住。平成二十三年よりの作品三三二句に、既刊の句集から二十七年に逝去された父を偲ぶ句、二十八句を加えて上梓。巻頭に長峰竹芳主宰の鑑賞十六句(「好日誌・風韻帳より」)を飾り、あとがきに、出会えた人への感謝と今の幸せを記す。青雲賞、好日賞受賞。俳人協会千葉県支部幹事。深秋の生地に風を聞く日かな  
夕映えの海ある暮らし木守柿  
秋さびの音となりゆく父の声  
落葉踏み納骨の山父母の山  
(平成28年9月発行・文學の森)

●句集『水陽炎』 長井 寛 著

塩野谷仁代表「遊牧」の同人、昨年「第十七回現代俳句協会年度作品賞」を受賞された実力作家。新潟県生まれ、鎌ヶ谷市在住。平成十九年から二十八年の三四二句を収載。塩野谷氏が序文にて

太鼓判を押す期待の作家。著者は帯文に「俳句は旅人の素心より生まれる。真つさらなそんな俳句を詠みたいと思う」と。現代俳句協会会員。

来世を蟬の穴より覗き見る  
あこや貝月の雫を身籠れり  
白骨の母とふたりの十三夜  
一羽づつ曇天になるゆりかもめ

(平成28年10月発行・現代俳句協会)

●句集『銀の笛』 栗原公子 著

「沖」の同人、幹部としても活躍中の著者の第一句集。平成十四年よりの作品三五〇句を収載。能村研三主宰が、表題(銀の笛)欲し全山を芽吹かせむ」と、益々の期待を込め懇切な序文を、葉文を神野紗希氏が寄せている。静かな空間が魅力の好句集。俳人協会会員。東京都生れ浦安市在住。

佳きことのひそみてをらむ初曆  
砂時計の時は銀色クリスマス  
月明の宙に出づるに銀の鍵  
綿虫や喪中葉書に銀の花

(平成28年11月発行・ふらんす堂)

新入会員一句

湧水より風たち上るつくつくし  
母の背の裾に凜しずまりぬ  
クリムトの接吻銀杏落葉かな  
愛おしさ募る十月桜かな  
冬景色楽器にすればコントラバス  
十六夜の男階段踏み外す  
悪党の住んでいそうな冬の月  
年詰まる板一枚の露店商  
放心の形に置かれ冬帽子

坂本 好子  
鈴木 秀子  
森井美恵子  
新井 京子  
高野 礼子  
小野 功  
伊藤 典子  
岡本 秀子  
佐々木幸子

轉をきく白書院黒書院  
竹トンボ冬空を飛べ肥後守  
初春を思う存分シャボン玉  
生まれてのこと究むべく年迎ふ  
二人ゐて蒲の穂絮にかき消され  
ふみいりぬ地獄のかまのふたのみち

受贈誌より(前号続き)

軸(二月号)

疲れた雲雪がちぎれてきたらしい  
初詣ここは御府内神楽坂  
瀬祭(一月号)  
酉年の初鶏鬮を展き鳴く  
夏日(三二〇号)  
男物セーターざくと着て真昼  
野火(二月号)  
沖晴れて波風荒き石路の花  
初蝶(二月号)(昭和五十二年作)  
風荒き探梅行とはなり果てぬ  
半島(二月号)  
名ハンター鳥の影見て膝で撃つ  
百鳥(一月号)  
鷹の舞ふ民話の里を廻りけり  
悠(二月号)  
岬交はし来て初漁の遠汽笛  
遊牧(一〇七号)  
七癖のひとつ冬蝶追いかける  
ろんど(二月号)  
文机に子規の体温雁渡る

秋尾 敏  
中路 素童  
本田 攝子  
望月 百代  
菅野 孝夫  
小笠原和男  
武田 和郎  
大串 章  
水見 壽男  
塩野谷 仁  
すぎき巴里

事務局日記

◆第四回理事会(出席者十八名)

日時 11月26日(土) 14時から16時  
会場 千葉市「ホテルプラザ菜の花」  
議事 1 平成28年度吟行会報告及び反省  
2 平成28年度千葉俳句大会報告及び反省  
3 第31回協会賞について  
4 第2回千葉県俳句大賞について  
5 小委員会報告  
6 45周年記念新春俳句大会・祝賀会について  
7 会報「真木」一八〇号について  
8 事務局報告、その他

会員異動

新会員

坂本 好子(浦安市) 鈴木 秀子(いすみ市)  
森井美恵子(千葉市) 岡本 秀子(千葉市)  
伊藤 典子(流山市) 小野 功(野田市)  
高野 礼子(我孫子市) 佐々木幸子(野田市)  
新井 京子(千葉市) 中川 素子(柏市)  
下平 誠子(千葉市) 磯部 洋子(千葉市)  
沼田 勇藏(佐倉市) 根本 兮子(佐倉市)  
松山 足羽(佐倉市)

謹 訃

豊田みどり、酒井秀洋、佐藤山人  
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

今号は、当協会設立四十五周年を記念しカラーにて十頁でお届けします。お忙しい先生方にご寄稿を頂きました。お味読ください。俳句大会・祝賀会の撮影は松本・細根理事が担当しました。(紀)